

2026.03.15.

## 「生きた水が流れ出る」

旧約 エゼキエル書 47章 8～9節

新約 ヨハネによる福音書 7章 37～39節

### 1. はじめに

イエス様は今朝、聖書の言葉を通して、私共にこのように告げておられます。「**渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。 7:38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。**」この御言葉によって、イエス様は二つのことを今朝、私共に告げておられます。それは第一に「招き」です。そして、もう一つは「約束」です。このイエス様の「招き」と「約束」を心に留めながら、丁寧に御言葉に聞いていきたいと思えます。

### 2. 仮庵祭りにおいて

さて、イエス様がこの言葉を語られたのは「**祭りが最も盛大に祝われる終わりの日**」でした。この祭りは「仮庵祭」です。この仮庵祭というのは、ユダヤの三大祭りの一つでした。三大祭りというの、現代の暦では4月頃になります「過越の祭」、それと5. 6月頃に行われる「七週の祭り」或いは「五旬祭」と呼ばれる祭り、そして、10月頃に行われる「仮庵祭」です。この三つはユダヤ本国は勿論のこと、遠くに散っているユダヤ人もエルサレム神殿に巡礼に来る、大変盛大な祭りでした。この仮庵祭は10月頃という時期からも分かるように、収穫祭という意味という意味がありました。そしてもう一つ大切な意味は、イスラエルが奴隷であったエジプトからモーセに率いられて脱出し、荒野の旅を40年したことを覚えるということでした。仮庵というのは、仮の庵という字に惑わされて、何か小ざれいなものをイメージするかも知れませんが、文字通り木の枝や棕櫚の葉などで作った掘っ立て小屋よりも粗末なものです。そこで一週間生活する。そのことによって、先祖達が味わった出エジプトの旅の苦労を思い起こし、その旅を守り、支えてくださった神様に感謝するわけです。この祭りの間中、エルサレム神殿に毎日人々は犠牲を捧げに行きました。犠牲を捧げるというのが、当時のユダヤ教の礼拝の仕方だったからです。そしてこの祭りの最後の日に「水汲み」と呼ばれる儀式が行われました。これはエルサレムのシロアムの池から水を汲んで、エルサレム神殿の祭壇に注ぐというものでした。この儀式をイエス様は意識してこの言葉を告げられたのだと思えます。

### 3. 大勢の人に、大声で

イエス様はたくさんの人々でごった返していたエルサレム神殿の境内で教えられました。ここで

聖書はイエス様が「**立ち上がって大声で言われた。**」と告げています。イエス様はぼそぼそと語られたわけではありません。その祭りに来ている人々皆に聞こえるように、大声で語られました。皆に聞こえるようにというのは、皆に伝えたいとイエス様は思われたからでしょう。これはどうしても皆に伝えなければならない、そのようにイエス様は思われた。あなたには教えたいけれど、あの人には伝えなくて良いということならば、伝えたい人にだけ語ることになりますから、大声で語ることはしません。コソコソ、ヒソヒソ話すことになります。しかし、イエス様がこの時語られたのは「大声で」でした。皆に伝えなかったからです。そのどうしても伝えたいとイエス様が願われたこと、それが「招き」と「約束」でした。

#### 4. 出エジプトの旅における渇き

まずは「招き」です。イエス様は「**渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。**」と大声で告げられました。時は「仮庵祭」の最後の日です。エルサレム神殿に来ている人は、皆出エジプトの旅のことを思い起こしていました。この 40 年の旅の間、イスラエルの人達は何に一番心を向けていたでしょうか？ 第一に水でした。イスラエルの人達が旅をしたのは、荒野です。日本はどこでも水があり、緑の木々があります。山に行っても、岩の間から水が流れています。でも、イスラエルが旅をした荒野はそのような所ではありません。岩と砂ばかりで、川はなく、オアシスに水が湧いているだけです。水がどんなに大切か、イスラエルの人達はこの旅の間中思い知らされたことでした。そして、神様はずっと水を与え続けてくださいました。とても有名な出来事として、出エジプト記 17 章にこういう出来事が記されています。「イスラエルの民がモーセに率いられてエジプトを脱出して荒野の旅を始めた頃、レフィディムという所に宿営した。しかし、そこには水がありませんでした。イスラエルの民はモーセに対して「我々に飲み水を与えよ」と訴えます。民は喉が渇いてしかたないので、モーセに向かって不平を言います。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか。わたしも子供たちも、家畜までも渇きで殺すためなのか。」ひどい言葉です。更に人々はモーセを殺そうとまでします。水が無いところに自分たちを導くとはどういうことだ。私達を殺すつもりか。そんな怒りがモーセに向けられました。モーセは神様に祈ります。神様はモーセに「わたしは岩の上であなたの前に立つ。あなたはその岩を打て。そこから水が出て、民は飲むことができる。」と告げ、モーセがその通りにすると岩から水が流れ出したという出来事です。水が無いということは、命が尽きるということで、イスラエルの民はモーセに不平を言い、神様が支えてくださることを信じられなかったわけです。しかし、神様はこの出来事を通して、必ず水を与え、渇きをいやし、命を守り、導いてくださることを示されました。

#### 5. 渇いている人

このイエス様が「**渇いている人は誰でも**」と告げられた時、仮庵祭に来ていた人々はこの出来事

をすぐに思い浮かべたに違いありません。そして、『『**渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。**』』と告げるこの人は誰なのだろう？」「あの時、モーセが杖で岩を打って水を出したように、この人も水をくれるというのか？」と思った人もいたでしょう。あるいは、「いや、自分たちはもう荒野にいるわけではない。水はある。特に喉が渴いているわけではない。この人は何が言いたいのか？」そう思った人もいたでしょう。では、イエス様は「渴いている人」ということで、どのような人に声をかけ、招かれたのでしょうか？それは、そこにいた全ての人です。更に時代を超え、場所を越え、生きている全て人に向かってです。まさに、私共に向かってです。しかし、私達は「自分が渴いている」と思っているのでしょうか？この時も「自分が渴いている」と思っていた人は、多くはなかったかもしれません。しかし、それは「自分は渴いているとは思っていない」だけで、それは「自分が渴いていることを知らない」だけだとイエス様は見ておられました。大切なことは、私共が渴いていると思っているかどうかではなくて、イエス様は私共を渴いている者として見られ、その渴きが何であるか、その渴きをどうすれば癒やすことができるのかをイエス様は知っておられ、そして私共を招いておられるということです。

## 6. 渴いた人を招く

私共は自分が何者であるかということを、当たり前のように知っているわけではありません。普通に生活をしている中で、「自分の渴き」を自覚することはあまりないかもしれません。しかし、何かのきっかけで「自分の渴き」を自覚する、それは自分が何者であるかを知ることとも重なってきます。

少し具体的に考えてみましょう。若くて健康で、仕事もバリバリ出来るとき、私共は自分は自分の力で生きていますと考えます。わたしも若いときはそうでした。誰かの助けや支えの中で生きていくということには中々気がつかない。そういうものなのでしょう。しかし、病気になったり、高齢になったり、或いは愛するものを失う、不慮の事故や災害に遭う。そういう時、私共は否応なく自分の弱さを知らされます。また、自分は死ぬべき者であるということを思い知らされます。そして、不安になります。それが「渴き」です。それは「命への渴き」と言って良いでしょう。また、今世界中を不安に陥れているのは、アメリカとイスラエルがイランと戦争を始めた。このままでは石油が来なくなる。経済はどうなるのだろうかと不安になる。やっとガソリンの暫定税率がなくなってガソリンの値段が下がったと思ったら、あっという間にガソリンは前の値段になってしまう。この戦争状態がいつまで続くのか誰も分かりません。自分たちが堅い基盤の上に生活していると思ったら、そうでは無いということに気づかされてしまう。明日への不安が湧いてくる。そこでも、私共は何か確かなものが必要だということに気づく。それも「渴き」です。「平和への渴き」と言って良い。或いは家族や愛する者や信頼していた人との関係が破れて、渴きを知ることもありましょう。「愛の渴き」です。そのように人は様々な渴きを覚えることがあります。そのような状況になって初め

て気づく渇きがあります。しかし、イエス様は私共が本来「渇いている者」であることを知っておられました。それで、この祭りに来ている全ての人に対して「渇いている人よ」と呼びかけられました。そして、「わたしのところに来て飲みなさい」と招かれたのです。それは、わたしはあなたの渇きを知っている。そして、わたしはその渇きをいやす水を与えることが出来る。だから、わたしのもとに来て飲みなさい。そう招かれました。渇きをいやす「水」をわたしは持っている。だから、わたしのところに来なさいと招かれたわけです。このイエス様の招きは、この渇いている人を何としてもその渇きから救いたいというイエス様の強い意志から生まれたものでした。イエス様の私共への愛から生まれたものでした。

## 7. イエス様は真実なお方

ここでイエス様が告げられた「わたしのところに来て飲む」とは、何を意味しているのでしょうか。それは、イエス様が「わたしを信じる者は」と告げているように、イエス様を信じることです。イエス様を神の独り子、救い主・メシア・キリストと信じること。イエス様がわたしを愛してくださり、わたしを「まことの命」「まことの平安」「まことの愛」を与えてくださる方として受け入れるということです。そうすれば「その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」と約束してくださいました。

イエス様の約束は真実です。イエス様は嘘つきではありません。これは、イエス様というお方がどういうお方であるかというとき、最も大切な点です。もし、イエス様が真実な方でなかったならば、ご自分がお語りになったことに対して責任を取られない方だったならば、キリスト教の信仰は成り立ちません。人は自分の言ったことに対して、例外なく完全に裏切らないと言える人はいません。そんなつもりではなかったとしても、後になってみると、以前に言っていたことと違うことを言ったり、言ったこと矛盾することをしてしまったりします。完全に真実な人など一人もいません。しかし、イエス様は真実な方です。イエス様はただの人間ではなく、神様の独り子だからです。ですから、私共は安心してこの方の言葉を信じる事が出来ます。

イエス様は自らの真実を、決定的な出来事をもって示されました。それが十字架です。イエス様は、私共が一切の罪を神様によって赦していただけるように、私共のために、私共に代わって、十字架の死を引き受けられました。自らの命を捨てて、私共のどんな渇きをもいやす水を与えてくださいました。どんなことがあっても、天と地を作られた神様は私を愛し、私を守り、私を支え、天の御国にある永遠の命を与えてくださる。そのための道を、自らの命を捨てて開いてくださいました。ここに愛があります。ここに真実があります。

## 8. 生きた水：聖霊

では、イエス様が約束された「その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」と

はどういうことでしょうか？すぐ後に「イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている“霊”について言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、“霊”がまだ降っていないからである。」と告げられました。つまり、イエス様のもとに来て、イエス様を信じるならば、その人に聖霊が降り、そして更にその聖霊は周りの人々に向かって流れ出ると約束されたということです。「生ける水」とはその水に命があり、それを飲む私共を生かす水です。

イエス様を信じるなら、その人に聖霊が降ります。そして、その聖霊が周りに流れ出ていく。イメージとしては、今朝、イエス様を信じる人には聖霊がダーッと注がれている。生ける水である聖霊は、ちよろちよろと、ポタポタと私共に注がれるものではありません。大雨や滝に打たれるようなイメージです。そして、その聖霊は私共の中に留まるだけでなく、ダーッと今度は洪水のようにここから川となって流れ出していく。聖霊の滝、聖霊の川です。この教会、また私共は「聖霊の滝壺」みたいものです。

そう言われても「聖霊」て何？と思われる人もいるかもしれません。私も正直な所、洗礼を受けましたもずいぶん長い間、聖霊が注がれるということが良く分かりませんでした。ピンとこなかったと言った方が良くもありません。それは、気がつけばとても単純なことでした。聖霊を受けていながら、聖霊が与えてくださるものを聖霊によってだとは気づいていなかっただけのことでした。皆さんは今日、主の日の礼拝に集われました。それは自分でこの礼拝に集うために、色々な仕事を片づけて来られた方もおられるでしょう。それは素敵なことです。しかし、そのように私共に働きかけ、導いてくださった聖霊なる神様のお働きの中でそれが出来た。それを自分の信仰心や熱心によって出来たと思っていると、いつまでたっても聖霊なる神様が自分に降っていることが分かりません。お祈りするの、台所に立ちながら賛美をするの、家族に優しく出来るの、隣りに優しく出来るの、明日への不安から解き放たれ安心して生活できるの、そして良き人々に囲まれて生きることが出来ているの、全ては聖霊なる神様が注がれているからです。

## 9. 川となって流れ出る

この私共に注がれた聖霊は、私共の中にじっとしているわけではなくて、外に向かって流れ出ていきます。それは、様々な渴きを覚えている、渴きの中に生きている人と私共が出会っていく中で、「もう渴くことがなくなる生きた水がここにありますよ、イエス様のところに行ってみませんか」と伝えていくことになるからです。ここに「まことの希望」「まことの愛」「まことの平安」「まことの喜び」がありますよと伝えていくことになるからです。それは、言葉で伝えることもありませんけれども、それ以上に「私が為す行為」や「私という人間の存在そのもの」がそれを語っていくこととなります。例えば、私共の口は放っておけば不平や不満や愚痴そのようなもので一杯になってしまうものです。しかし、聖霊を注がれた者の口には祈りと賛美と感謝と喜びが満たされていきます。どうすれば自分が得をすることが出来るかではなく、どうすればこの人の役に立てるか

考えます。仕えさせる者ではなく、仕える者になろうとします。目に見えるものに心を奪われることなく、見えないものに目を注ごうとします。

例えば、「困っている」「辛い」という言葉を聞けば「祈っているね」と告げ、実際その人のために祈る。毎日、何度でも祈る。それは相手に伝える必要は無いかもしれませんが、伝わるものです。そして、「何とか大丈夫になった」と聞けば、「良かった、良かった」と我がことのように喜ぶ。そこには穏やかな空気が流れるでしょう。そのようにして、聖霊は私共に降り、そして私共から外に向かって流れ出ていきます。「聖フランシスコの平和の祈り」というとても有名な祈りがあります。生きた水を与えられたから、どのように私共の中で生きた水が川となっていくのかが、祈りにおいて示されています。こういう祈りです。

「わたしをあなたの平和の道具としてお使いください  
憎しみのあるところに愛を  
いさかいのあるところにゆるしを  
分裂のあるところに一致を  
疑惑のあるところに信仰を  
誤っているところに真理を  
絶望のあるところに希望を  
闇に光を  
悲しみのあるところに喜びをもたらす者としてください  
慰められるよりは慰めることを  
理解されるよりは理解することを  
愛されるよりは愛することを わたしが求めますように  
わたしたちは 与えるから受け  
ゆるすからゆるされ  
自分を捨てて死に 永遠のいのちをいただくのですから」

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、イエス様の「招き」と「約束」のみ言葉を与えてくださいました。ありがとうございます。私共がイエス様の招きに応じてイエス様を信じ、イエス様が約策してくださいました命の水である聖霊を豊かに与えられ、あなた様の御業道具として、為すべきことを為していくことが出来ますように。私共を罪の赦しと永遠の命の希望の中、信仰をもって愛の器として健やかに歩んでいけますように。感謝と賛美と祈りと喜びで満たして行ってください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン